



Title	附錄 懷德堂所藏 懷德堂先賢著述書目
Author(s)	吉田, 錦雄
Citation	懷德. 1941, 19, p. 1-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷德堂先賢著述書目

所藏

德

堂

例　言

一、本目録は、大正五年本堂重建以來現在に至るまで二十五年間、本堂に於て購求し、又は諸家より寄贈せられたる舊書堂先賢の著述を茲に一括して、以て其の書目を掲げ、聊か其の内容に就て小解を施したものである。

一、一昨年中井家より寄進せられたる懷德堂及び水哉館の遺書と重複するものあるは、懷德第十七號附錄遺書目參看の旨を記して多く省略に從ふた。而して本目録には曩に伊藤家より寄贈せられたる五十餘點を茲に收めた、有不爲齋本とあるのは即ち是れである、其の他諸家より寄贈を受けたるものも、それ／＼明記して置いた、此の機會に於て寄贈者に對し改めて感謝の意を表する次第である。

一、書堂先賢中、創立當時の講師たりし伊藤東崖、並河誠所、三輪執齋三先生の如きは、何れも其の名高く著述も多いが、たゞ臨時に出講せられたる人々であるから、今は此處に收むる事を省略した。また門人中で地方の藩儒になつた脇愚山、岩村南里、丸川松陰、佐藤一齋諸先生の如きは是れ亦有名な人々であるが、大阪の文教に縁が薄いから今回は省く事にした。而して大阪若くは其の附近に住した人で、當時は其の名聞ゆるも今日は已に不聞の學者となり、其の著述も亦散亡し

て、存否明かならざるもののが頗る多い、因て先づ以て其等を搜訪蒐集して、以て闡幽顯微の實を揚ぐるが後人の義務と考へたので、茲に其の目録を作る事にした、固より其の收藏する所未だ其の半ばにも達せぬ、將來一層此の方面に意を注ぎたいと思ふ、偏に大方諸彦の御援助を希ふ次第である。

吉　田　銳　雄　敬　識

昭和十六年九月

所懷德堂先賢著述書目

一 萬年先生論孟首章講義

一 冊

三宅石菴先生の講義を筆記したものである、明治四十四年十月懷德堂記念會に於て印行せる「懷德堂遺書」中、「懷德堂五種」一冊の内に收む、懷德第十七號附錄遺書目「一七」參看。

二 懷德堂考定中庸 附、中庸錯簡說

石菴先生考定
竹山先生編並書

墨本一帖

第十七號遺書目「一九、二一」參看。

三 萬年先生遺墨帖

一帖（函入）

右は大正六年五月、中井黃裳先生がこれを書畫骨董雜誌社より獲て本堂に寄贈せられたもので、函蓋裏に同先生の識語がある、それによると、此の帖は萬年先生が曾て讀岐に居られた時に任意手寫せられたものを門弟子が收輯糊繕したものであると云ふ事で、帖中載する所歌文雜記共に二十有三紙を收めてある、先生の遺墨存するもの寥々たる今日誠に寶重すべきものゝ一である。（第十八號附錄石菴先生遺稿參看。）

四 陌頭楊柳枝帖

石菴先生書

一帖

有不爲齋舊藏に係る、堅一尺九分、横四寸、正楷にて五絶一首を書す、富永芳春の子荒木蘭

皋に書き與へたものなる事、其の子梅闇の奥書せる左の識語によつて知られる。

先考韶齋。蚤入學校。學於萬年先生。餘閑請學書。先生曰。楷正也。以時習而可也。迺一過而見惠焉。此帖即是也。後門弟子荒木彬謹識。

五 紫烟帖

石菴先生書

拓本一帖

唐詩十九首を草書にて寫したもの（別項石菴蘭洲張交屏風參看）を双鉤填墨して板に上せ、これを拓本にしたもので、其の板木は今現に中井黄裳先生の許にある、奥書に其の子春樓先生明和元年作る所の跋が附してある、それによると石菴先生の揮寫したもの多くあつたが、子弟皆これを揃取して今存するを得るもの、僅に此の絶句十九首のみ、間々人が之を蒐輯して以て永久の傳を謀るので、こゝに先生歿後三十五年に上刻した旨を記してある、紫烟帖の名は、最初の一紙に「紫烟衣上繡春雲」云々とあるから取つたもので、其の題箋は竹山先生の筆に成る、豎一尺二寸、横一尺六寸三分。

六 監本四書

永日堂（三宅春樓先生）點

五冊

享和三年十月大阪河内堂の藏梓に係る、永日堂とは三宅春樓先生の齋名である、懷德堂考に云ふ、「竹山答頼千秋書に據れば、四書五經の懷德堂點を世に布かんとして、四書は長者なる春樓に譲りしが、意に満たざる處もあれど、大意は異らずと云へり、爲ノ□所ノ□の舊點を爲ニ□所ノ□と改めたるを初め、其の他特色多し、一齋點は春樓點に本くとも云へり」とあつて、

竹山先生學主の時に新刻したものである。

七 春樓先生書帖

一帖

有不爲齋の舊藏に係る、唐詩五絶（趙氏連城璧、此地別燕丹、漢庭榮巧官）三首を正楷にて大書したもので、習字手本である、落款はない、竪八寸、横四寸四分。

八 道澄寺鐘銘

世傳小野道風書
三宅春樓、土橋良慶等模刻

拓本一帖

芳野の西北三里許りの榮山寺に在る鐘は、原と山城深草の里道澄寺の物で、故あつて此處にあるが、其の銘は小野道風の書と相傳へて居る、それを延亨年間に蘭洲先生の友人土橋良慶（平野人）が其の寺に遊んで、偶これを見て大に之を奇とし、三宅春樓先生等と相謀つて之を拓本にして持歸り、更に寛延二年に至り之を板に刻して懷德堂に存したものであるといふ、今此の板木は中井黃裳先生の許に寶重されて居る、奥書に中井斎菴、五井蘭洲兩先生の跋が附してある、堅一尺九分、横六寸、題簽は竹山先生の筆に成る、（斎菴先生の跋は本號附錄遺稿中に收む。）

九 正非物篇 五井蘭洲先生撰

六卷六冊

右は竹山先生の非徵と共に明和四年甲辰大阪書舗文海堂及び藏六館より板行されたものである、扉の題簽は中井履軒先生の筆と見ゆ、卷首に竹山先生の筆に成る明和三年所作の序があ

る、毎半葉十行、行毎に二十字、第十七號遺書目「二二」參看。

一〇 中庸首章解 蘭洲先生撰

抄者明かでないが、蘭洲先生の筆意あるより察すれば、其の門人の寫したものでないかと思はれる、毎半葉九行、三十二頁、中庸首章だけを詳しく述べ假名文にて解したものである、首尾に序跋が附してある、何れも蘭洲先生の筆らしいが、著作年月は記していない。

一一 鶴肋篇 蘭洲先生撰

抄本七卷三冊(一帙)

一二 瑣語 蘭洲先生撰

三 瑣語 蘭洲先生撰

再板本二冊

蘭洲先生の漢文隨筆であるが警發の益多き書である、質疑篇と同じく手稿本は散佚していない。

が、明和四年三月に質疑篇と共に合刻され、原刊本が出た、是は天保三年三月大阪敦賀屋九兵衛等によつて發行された再板本である、卷首に履軒先生の序を入れ、卷尾に明和三年二月竹山先生の筆に成る瑣語跋がある、毎半葉九行、行二十字、因に是の書は昭和二年日本儒林叢書の隨筆部第一卷の中にも收められた。

三 質疑篇 蘭洲先生撰

一冊

是の書原本は散佚して遺書中に存しないが、明和四年瑣語と共に合刻されたもので、大阪書舗文海堂得寶堂の發行である、初印本は卷頭に竹山先生が明和三年作る所の質疑篇序があり、

卷尾に履軒先生の刻質疑瑣語序がある、是の書は先生が經史を讀んで、疑を生じ、其の疑ふ所が解を得ると得ざるとを問はず、之を筆したものが、積んで數千條を得たから、寛延庚午盛夏これを繕寫して篇をなし識者に質すと記されて居る、經書に對する卓説が多い。

古今通 蘭洲先生撰、加藤竹里先生補

抄本七冊

古今集を注釋したもので、卷頭に蘭洲先生の序あり、云ふ「此の集は先に萬葉の説を集め、伊勢物語を内外に分ちし時、此の集を併せ考る事のありて、家に傳ふる定家卿の遺書、顯昭の注、榮雅の抄、契沖の抄などを見侍りし、中略顯注は略せり、榮注は心ゆかず、契注は煩はし、よりて僭忌を忘れて其説のまされると覺るを抄出し、又自らの簡見をも加へ、かな序よりはじめて歌をつくし、一つ子の娘に残しあはべる、敢て此集を注すとにはあらず」と、作つた時の年月は記してない、次に加藤竹里先生が天明五年乙巳季冬作る所の附言あり、蘭洲先生より刪補すべき命を受け居たるを遂に果す旨を記し、次に凡例六條を書き、以下全集を解釋してある、而して竹里の刪補は「補」として別行にそれゝ書添へてある、抄者は明かでないが、達筆に書かれて居る、而して兩先生とも其の手稿本は散佚したか遺書中に存しない。

五語通 蘭洲先生撰

四卷二冊

明治四十四年懷德堂記念會に於て印行せる「懷德堂遺書」の一で、當時平瀬家本を底本とし、手稿本を以て對校して出來たものである、手稿本は第十七號遺書目「二三」に收めてある、參看、伊勢物語の注釋書で、寶曆元年冬著はす所に係る、時に年五十五。

二六 蘭洲茗話 蘭洲先生撰

二卷一冊

是の書も手稿本は散佚して遺書中にはない、是は明治四十四年懷德堂記念會に於て印行した懷德堂遺書中の一で、當時大阪府立圖書館本を底本とし、數種の傳寫本を以て對校し、一冊に合裝したものである、假名文の隨筆で、經史に關する考證的の事柄が多く、瑣語質疑篇と共に、必讀すべき有益の書である。

二七 新題百首和歌 蘭洲先生撰

抄本一冊

原本は其の存在を明かにしないが、右は西村碩園博士の小天地閣叢書中に收めてある、詠物の和歌題で、奥書に「右新題百首倭歌者五井蘭洲子所詠也、今以懷德堂裡之本令轉寫畢、元治元年三月五日春愛印、附云同時川井立牧以此題詠之由傳聞、未得其稿、他日可索也」と記してある、忠愛とは何人か未だ詳かにしないが、懷德堂の門人らしい、尙竹山先生にもこれによつて詠じた百首詩がある、別項「五九」參看。

二八 承聖編 蘭洲先生撰

抄本一冊

右は釋氏を排撃した假名文の書である、堂友會員白井久吉君の寄贈に係る。

二九 文章廻瀾 蘭洲先生撰

抄本一冊

袁中郎、江進之、曾退如、艾南英、艾千子等の詩文評三十餘條を摘錄して、上頭に簡単な評が加へられて居る、蓋し徂徠一派の古文辭を排撃する爲に作られたものであらう。

二〇 喻叢 蘭洲先生撰

抄本一冊

原本は散佚して見るを得ないが、是は舊門人小西某の抄寫に係る、譬喻は語約にして意長く、文章辭辨の一大機括であるといふ考から編まれたもので、經書史傳諸子の中から譬喻に關した語句を摘錄したものである、每半葉九行、行二十字、凡て三十三葉。

三 蘭洲先生習字帖

一帖

堅九寸四分、横三寸五分の折帖で、初めに「南山之壽」と大書し、以下唐詩を隸楷行草の各體に書し、尙平假名の書も添へてある、終に「子祥」と落款し印記二顆を捺してあるが、蘭洲先生の筆蹟を知るには好箇の資料である。

三 蘭洲先生抄書

一冊

蘭洲先生壯年の時のものか、備忘の爲に諸書を雜抄したもので、每半葉八行、行二十字凡て百二十五葉、濱和助氏の舊藏本である。

三 僧契沖碑文

蘭洲先生撰、加藤竹里先生書

拓本一冊

寛保三年冬蘭洲先生が契沖阿闍梨の碑文を撰し、加藤竹里が之を書したが、安永八年大阪の柏原屋書林がこれを板行したものである。

三 蘭洲先生追悼詩歌

抄本一冊

安永三年三月十七日は五井蘭洲先生の十三回忌辰に當るので、三宅春樓、中井竹山兩先生を

初め書堂門人等が各追悼の詩歌を作り、之を抄錄したものである、歌二十二首、俳句一首、漢詩六篇を收む、抄者未詳。

三五 蘭洲五井先生家譜、中井氏家譜

抄本一冊

右は碩園先生の小天地閣叢書中、「懷德堂記錄拾遺」冊内に收む。

三六 不問語 中井登菴先生撰

校正用本一冊

三七 同

同

三八 同

同

懷德堂堂友會印一冊

補刻本一冊

第十七號遺書目「二六」に收めたるは初印本で、此處に掲げたる校正用本は竹山先生の跋もな
くたゞ本文のみ、而して卷末に「人丸の歌に云々」といふ一條多く、且つ三十四葉裏九行目「う
つはものゝ四かとありて」の十二字を抹殺してあるが、初印本は此の處「ふつくえ引よせ其横
を我前にして」と改めてある、尙初印本に比するに校正用本は文字の誤及び頁數の誤がある。
補刻本は嘉永二年三月の印行に係る、巻尾に書舗青藜主人の識語がある、それによると、竹
山先生の時に上梓した初印本は、板木半ば亡失したので、今回之を補刻したと記してある、
併し怪むべきは、扉に撰者と書名とを記し其の左に「大阪書舗藏六館、獻可堂發行」と書か
れてあるが、其の書は確に蕉園先生の筆である、初印本には此の扉がないのは不思議である、
題箋は何れも竹山先生の筆に係る。

懷德堂々友會本は、大正十五年十月懷德堂二百年並に同記念會十年を記念する爲に重印したものである、卷端松山教授の例言中に、寛政三年刊本を底本としたとあるが、調べて見ると前記の校正用本を底本とし、たゞ奥書のみを初印本によつて書込んだ事が分つた。

二〇 哀 祭 私 説

麌菴先生撰

抄本一冊

是の書二部あるが、何れも内容に異つた所はない、共に抄者は不明である、第十七號遺書目「二七」參看、但し右の書には附錄はない。

三〇 哀 祭 私 説

麌菴先生撰、竹山先生補正、

抄本一冊

第十七號遺書目「二七」參看、奥書に「文化五辰二月淵崎正理寫之」とあり、書風竹山先生に似たれば其の門人か、有不爲齋の舊藏に係る。

三一 五 孝 子 傅

麌菴先生撰

一冊

明治四十四年懷德堂記念會で刊行した「懷德堂五種」の内に收めてある、大阪堀江の居船頭かつらや太郎兵衛が、罪を獲て斬罪に處せらるべきを五人の子女が孝心によりて罪を許されたる實事を記したもので、元文四年己未三月二十三日作つた假名文である、卷末に五井蘭洲先生の評語がある。

三二 富貴村良農事狀

麌菴先生撰

一冊

同じく「懷德堂五種」中に收む、紀伊富貴村の農次郎左衛門父子が仁徳ありし行狀を假名文

にて記したもので、享保十三年長月七日作る所である。

三 息游先生事狀

鄧菴先生撰

抄本一冊

奥書に享保八年癸卯六月二十八日中井誠之撰とあり、「くま澤うしの歌のまへがき」とて了介の歌十首を載せたる前に記してある、文政戊子夏五月十四日小西義一郎といふ人が寫したものであるが、了介傳を補ふべき資料である、本號附錄「鄧菴先生遺稿」に收む、參看。

三 春のことば

鄧菴先生撰

抄本一冊

新年の春光を眺めて、時に汚隆ありと雖も我が邦歴代の天皇が民を恵み憐み給ふにより、下も亦知らずぐ天皇の則に従ひ奉る事、春の惠に草木の色めき渡るが如しとて、古今を歴觀し、大宮御所の幾千代かけて榮えます事の目出たさ、是れ我が日の日本の春なりけらしと結びたる假名書の大文章である、紙數凡て十一葉、有不爲齋舊藏。

三 易

說 中井竹山先生撰

抄本一冊

懷德堂舊門人小西某の抄寫に係るか、竹山先生の易斷（第十七號遺書目「二八」參看）中より河圖洛書辨、文言傳辨及附言を抄錄したものである。

三 尚書管見 竹山先生撰

抄本一冊

第十七號遺書目「三一」參看。

三七 中庸定本 竹山先生撰並書

拓本一帖

第十七號遺書目「二一」參看。

三 小學 斷 竹山先生撰、並河寒泉先生手抄

假綴二冊

原本は逸して傳はらないが、元來書物の欄外に記されて居たものを、寒泉先生が摘鈔されたものであるが、是は後に別項の如く國讀刪正小學として懷德堂から出版された。

三 國讀刪正小學 竹山先生雕題

四冊

四〇 論續 非徵 竹山先生撰

八卷八冊

嘉永三年正月懷德堂の藏板に係る、陳選の句讀本を用ひ、欄外に竹山先生の説を加へてある。

前記蘭洲先生の非物を正編とし、是の書を續編として、共に徂徠の論語徵を攻撃したものの、天明四年の板行に係る、第十七號遺書目「三三」參看。門人早野仰齋（名は辨之、字士譽）の校正に係り、天明三年三月作る所の跋がある、因に是の書初印本は、大阪書肆文海堂及び藏六館發行としてあるが、其の後刷に係るものは、合本四冊となり、發行元の藏六館が賭春堂に代つて居る、刊記はない。

四 逸 史 竹山先生撰

十三冊

三 同

同

前者は懷德堂に於て天保十三年上梓、嘉永元年印行したもの、後者は拙修齋叢書中のもので、白文の木活字本である。第十七號遺書目「三五」參看。

四 逸 史 問 答 竹山先生撰

抄本二冊

竹山先生の著逸史に就て、潭花生といふ人が質疑を發したるに對し、同先生が同關子と署して答へたる假名文の書である、是の書第十七號遺書目「五三」國字牘附卷の内にも收めてあるが、少し脱葉がある。

四 詩 律 兆 竹山先生撰

十一卷三冊

是の書も手稿本は散佚した、是は安永五年大阪加賀屋善藏等によつて板行されたもので、卷端に寶曆八年三月作る所の竹山先生自筆の自序、次に明和七年作る所の凡例十六則及び安永元年の附記がある、而して五七言律及び七言絕句の正格、變格、拗格の諸體に就き、一々例を擧げてこれを説き、餘考として體格、四聲之拘、八病之非、正格偏格、拗體、雜評を述べ、次に附錄として、詩論八篇を收めてある、終に斎菴門人中村有則（號兩峯、平野人）が安永五年仲冬作る所の跋があるが、傳へ聞く、是の書の板下は兩峯の筆になると。

五 禁 隱 集 竹山先生撰

九卷、附錄一卷共五冊

明治四十四年十月懷德堂記念會に於て印行した懷德堂遺書中の一で、竹山先生一代の詩文集である、手稿本は年代順に書いて居るが、是は各體別に分ちてあるのは並河寒泉先生編次本（清嘉堂文庫所藏）を底本としたからである、是の書校正粗漏の爲、誤字の多いのは遺憾であ

る、第十七號遺書目「四三」參看。

哭奠陰略稿 竹山先生撰

抄本一冊

何人の抄寫に係るか明かでない、第十七號遺書目「四四」參看。

四七 東征稿一卷 西上記一卷 竹山先生撰

小本一冊

嘉永六年江戸書肆青雲堂の板行に係る、其の内容手稿本に同じ、第十七號遺書目「四五」參看。是の書は板木を大阪の青木嵩山堂が買ふたものか、明治になつて「東西遊記」として同堂からも發行せられた。

四八 西岡集 竹山先生撰

影印本一冊

明治四十四年十月五日懷德堂記念祭執行の日、革島氏の裔孫有尚氏が竹山先生の手稿本を一部縮刷影印して寄贈されたもので、其の祖幸渡氏の女名は順は、竹山先生の室人である、其の内容は第十七號遺書目「四七」參看。

四九 竹山先生文稿

抄本三冊

竹山先生の文八十六篇を抄寫したもので、何れも奠陰集に載つて居るものゝみ、抄者は奥書に寛政四壬子春二月謄寫于懷德書院、鹿林熊谷道伸（子屈）とあるから、同先生の門人であらう。

五〇 校正草茅危言 竹山先生撰

五卷十冊(二部)
小本五冊(一部)

木活を以て印行された拙修齋叢書中に、竹山先生の著述が四種（逸史、社倉私議、寔陰略稿、草茅危言）ある、是は其の中の一で、前摺と後摺と二部ある、牡丹花紋藍表紙の本が其の初印本で、刊記はない、後刷のものは、雲形大赭色表紙で、木活が餘程磨滅して居る、尙一部は明治元年十月京都同盟書房の合梓に係る富岡鐵齋校本の小本五冊本であるが、拙修齋本の用字を大分改めてある、而して之を第十七號遺書目「五〇」の手稿本に對校すると、脱字、誤字が相當に多い、而して何れも卷頭に竹山先生の自序はあるが、脇愚山の跋を存しない。

五一 社倉私議 附、附錄 竹山先生撰

一冊

此の手稿本は散佚して遺書中にはない、是は拙修齋叢書の一で木活字本である、脇坂侯より社倉の事に就き質議の事もあつたか、安永三年五月執筆して奉行に差出したもので、朱子の社倉之儀を和解し、且つ自己の意見を陳べたる一ツ書の候文である、終に社倉私議附錄として、寛政甲寅仲冬の筆に成る同じく社倉の事を記した一文を附してある。

五二 竹山國字牘 竹山先生撰

二冊

右は明治四十四年懷德堂記念會に於て發行せる「懷德堂遺書」の内のもので、原本（第十七號遺書目五一、五二、五三參看）八十八篇中の三十篇を摘抄編次したものである。

五三 經濟要語 竹山先生撰

一冊

是の書は第十七號遺書目（五一）の「竹山先生國字牘」中にも收められて居る、或る藩侯の依頼により古語中の「爲政以德」「有治人無治法」及び「量入以爲出」を意解したるもので、寛政七年春に成る、「近世社會經濟學說大系」本の「中井竹山集」に收めてある、紙數十一頁、因に此の集には此の外に竹山先生の草茅危言十卷、社會私議一卷、神惟孝（號晋齋、岡山人）の辨校に係る草茅危言摘要五卷等を收めてある。

五 公 田 說 竹山先生撰

一冊

右は答宮生として井田の事に就き論述したものである、第十七號遺書目（五二）國字牘續編の「答宮良佐」の中にも出て居るが、此の方が詳しい、別本でもあるか、「近世社會經濟學說大系」本の中井竹山集に收む、紙數十四頁

五 今村君執事（國字牘） 竹山先生撰

抄本一冊

舊書堂門人小西某の抄寫する所、某藩の今村泰行と云ふ人より政治上の意見を徵せられたるに對し、寛政五年首夏筆を執りて開陳したもので、第十七號遺書目第五一「竹山先生國字牘」中に闕けて居るものである。

五 蒙 養 編 竹山先生撰

一冊

五 同 同

抄本一冊

童蒙の爲に修身齊家の大道を説きたる好箇の教訓書である、初め「奐陰消息」と名づけたが

後改めた、第十七號遺書目「一六一」參照、前者は明治十二年三月堺縣女紅場に於て印行したもので、女紅場の教科書に用ひたものと見える、後者は懷德堂で大日本史を寫した時造つた野紙を用ひてあるが、抄者は明かでない、尙是の書は、懷德堂五種の内にも收められて居る。

五六 災後葬言 竹山先生撰

抄本一冊

西村碩園先生の小天地閣叢書中に收む、第十七號遺書目「五六」參看。

五九 和歌新題百首詩 竹山先生撰

抄本一冊

右手稿本は其の所在を明かにしないが、是は西村碩園博士の小天地閣叢書中に收めてあるものである、卷頭竹山先生が寶曆七年丁丑冬識す所の序に、蘭洲先生嘗て和歌新題一首を撰して之を賦し、川井子和（立牧）加藤子常（景範）及び先人（斉菴）續いでこれに和したが、先生は積善に命じて詩を作り以てこれに附せしめられた、所が會々先人の疾により遷延したが、遂に命に應じて業を卒つた、と述べてある、百首皆五言絶句である。

六〇 子華孝狀 竹山先生撰

一冊

右は竹山先生が其の門人稻垣子華の孝狀を記したもので、明和二年春懷德堂に於て印行したものである、板下は竹山先生の筆に成る、卷尾に履軒先生の跋がある、尙此の書は懷德堂門人入氏の舊藏に係るか、竹山先生作る所の「稻垣淺之函純孝記錄」を寫して卷尾に添えてある、第十七號遺書目「六八」參看。

六 貞婦さんの記録 竹山先生撰

一冊

同じく「懷德堂五種」中に收む、第十七號遺書目「五五」參看。

三 扶桑木說 竹山先生撰

抄本一冊

世に傳ふる扶桑木に就て論じたもので、寛政九年八月の所作、假名文である、終に撰者未詳の扶桑考と題する一篇が附してある。

三 懷德堂記 竹山先生撰並書

一帖

有不爲齋舊藏、堅九寸横六寸、第十七號遺書目「一五六」參看。

四 祠堂議 竹山先生問、履軒先生答

抄本一冊

中井家の祠堂に就て、竹山先生の間に履軒先生が答へたるもので、原本は中井家に在る、碩園先生の小天地閣叢書中、懷德堂記録拾遺冊内に收む。

五 背誦 竹山先生撰

抄本一冊

第十七號遺書目「一六〇」參看、抄者未詳。

六 十路鬪詩 竹山先生評

抄本假綴一冊

懷德堂の門下生早野橋隧、並河懸山の家で各詩社が設けられ、時々題を出して鬪詩が行はれた、是は其の一である、(第十七號遺書目一五八參看)、抄者は恐らく早野橋隧であらう。

六七 竹山先生拾遺錄 外篇二 寒泉先生編並書

一冊

竹山先生の撰著から洩れて居る詩文和歌、雜記等を拾輯したもので、貴重な資料が包藏されて居る、題箋に外篇二とあるから、尙内篇と共に幾冊があるものと思はれるが、他は散佚した、是は淡輪家の書庫から出たものである。

六八 竹山先生著述抄本

五種

閑距餘筆一冊 抄者未詳、第十七號遺書目「四九」參看。

東征稿一冊 「卷末に天保戊戌夏七月謄之尙友處士」とあり、前記及び第十七號遺書目「四五」參看。

西岡集一冊 竹島實山の抄する所、前記及び第十七號遺書目「四七」參看。

蒙養篇一冊 抄者未詳、前記及び第十七號遺書目「一六一」參看。

文瑕說一冊 抄者未詳、天明元年竹山先生が韓退之の送孟東野序に就て述べたものである、以上共に有不爲齋舊藏に係る。



究七經雕題略 中井履軒先生撰

抄本二十冊（内論語孟子典
謨接の五冊闕）

第十七號目錄「一九八一〇五」參看、抄者は未だ明かでないが、其の筆意頗る撰者に似たる所あれば、或は門人早野橋隧先生の筆でないかと思はれる。

七〇 周易逢原

履軒先生撰

活字本三冊一套

七一 同

同

抄本三冊一套

第十七號遺書目第「一七八」參看、前者は大正十五年伊丹岡田利兵衛氏が貲を捐て印行せしものに係る、卷頭に中井黃裳先生同年作る所の刊七經逢原序あり、卷末には附錄として同先生の刊誤が附してある。

後者は本堂の故松山教授が寫字生に託して寫さしめたものである。

七二 春秋左傳雕題略

履軒先生撰、山田寛校正

六卷六冊

第十七號遺書目「二〇一」參看、是の書弘化三年唐津藩山田寛（字士栗、一齋門人）の板行に係る、卷首に佐藤一齋の弘化三年作る所の序あり、卷尾に校正者の跋がある。

七三 論語逢原

履軒先生撰

四冊

明治四十四年懷德堂記念會に於て印行せる「懷德堂遺書」中の一である、第十七號遺書目「一八四」參看、是は西村碩園先生の舊藏で、同先生の朱批がある、寶重すべし。

七四 中庸逢原附大學雜議

履軒先生撰

共二冊（一套）

第十七號遺書目「一八六」「一八七」參看、是は前記の周易逢原と同じく伊丹の岡田利兵衛氏が昭和二年に印行したもので、三村崑山の手寫本を底本とし、更に水哉館の原本によりて校正を加へてある、卷末に中井黃裳先生の校勘記あり。

五
再校七經雕題略 禮記之部 七冊

履軒先生撰

聚星堂の刊行に係る。(發行年月不明)七冊の内五冊は、履軒先生の雕題であるが、後の二冊は補遺として和歌山の儒者志賀節菴が清儒の説を抄錄したものを載せてある、第十七號遺書目「二〇二」參看。

矣典謨接履軒先生撰 抄本一冊

第十七號遺書目「一九九」參看。

弋深衣圖解 履軒先生撰、寒泉先生題箋 抄本一冊

第十七號遺書目「一三一」參看。

弋服忌圖 履軒先生撰 抄本一冊

同 同

抄本一冊

弋同

同

一冊

第十七號遺書目「二三五」參看、前者は京都の人小西某(舊書堂門人)の抄寫に係る、而して尙是には同先生の亥字説、簡筮、姓氏斷の三篇を合せ綴ぢてある、後者は誰人の抄寫か明かでない。

六 史記雕題 履軒先生撰、竹島賛山先生纂輯、抄本二十四卷五冊

中井柚園先生校正

履軒先生の雕題と名づけらるゝもの、七經雕題以外、別行のものは極めて稀で、概ね書物の上頭に書入れされたまゝのものを便宜上雕題と名づけて居るが、是は文化五年に門人竹島簣山が、書入れされた説のみを書下して編輯したもので、卷首に早野橋隧の序、卷尾に三村嵐山の跋がある、本堂所蔵西村碩園先生の小天地閣叢書坤集に收む、第十七號遺書目「二〇七」參看。

八 史記評林雕題 履軒先生撰、三村嵐山先生手寫

三十冊

履軒先生用ふる所の書と同じく、和刻の史記評林本を用ひて、これに雕題を寫したものである、伊藤有不爲齋の舊藏に係る。

八 史記雕題 履軒先生撰

抄本二冊

第十七號遺書目「二〇七」參看、是は零本で、たゞ卷十四及び卷十五（伯夷列傳より荀卿傳に至る）の二冊を抄寫したものである。

八 戰國策譚概雕題 履軒先生撰、早野橋隧先生寫、 三村嵐山先生書入

十五冊

履軒先生の首書に係る原本は散佚して傳はらないが、是の書は履軒先生用ふる所の原本と同一のものに相違ない、鮑彪注の和刻本を用ひ、これに其の雕題を寫したものである、是の書有不爲齋の舊藏に係る、卷端に伊藤介夫先生の書後一篇が附せられて居るが、それによると此の書上下左右に墨書し、註字を朱抹するものは、早野橋隧先生が、雕題を手寫したもので、其の別本と校讎し、或は見る所を書するに、朱墨を以てしたものは、三村嵐山先生の手書に

係ると記されてある。

八老子雕題 履軒先生撰

一冊

是の書手稿本は散佚して存しないが、恐らく原本は別行のものでなく、林注本の上頭に首書したものであらうと思はれる、それを門人が別に書下して、老子雕題と名づけたものが世に行はれて居る、茲に掲げたものは日本儒林叢書第六冊に收めたもので、叢書本は帝國圖書館所藏本に據つたといふ。一々章名を掲げて老子の所説に批評を下し、且つ林註の誤を正し、自説を述べたものである。

金莊子雕題

履軒先生撰、三村崑山先生寫、
伊藤介夫先生書入

十冊

履軒先生と同じく林希逸の口義本を用ひて、其の雕題を欄外に寫したものである、有不爲齋の舊藏に係る、卷端に伊藤介夫先生の書後一篇がある、其の内に「此書もと卷五より八卷に至る合せて四卷が闕けて居たから、並河本を借りて之を補寫し、始めて完本となつた、而して是の書中、墨書朱抹は皆雕題に係るが、余が見る所あるは則ち或は藍書を以てし、或は「和接」と署し、また其の前人の説を引く所は、必ず其の書名姓氏を記して、雕題と相淆亂しない様にした」と記してある。

八通語 履軒先生撰

同

板本 三冊

抄本 三冊箇入

八同

第十七號遺書目「一〇〇」及び「二二二」參看、前者は、遺書目「一〇〇」の板本で、其の内容同じ、たゞ早野橋隨及び清水中洲の序が、相前後するのみ。

後者は「懷德堂圖書記」の印記があるので、舊懷德堂の所藏であつたと思はれる、遺書目「二二二」を底本として、毎半葉十行、行毎に二十字に書かれて居るが、鈔者は誰人か明かでない、而して是は並河寒泉先生門人渡邊某が本堂に寄贈したもので、函蓋裏には編者の恩師市村盈岳先生（寒泉先生高弟）が、明治十九年四月識語を書かれて居る、尙是の書、寒泉先生門人森訥氏が註を書いて明治十七年印行したものが、多く行はれて居り、また拙修齋叢書中にも收められて居る。

六 傳 疑 小 史 履軒先生撰

抄本一冊

第十七號遺書目「二三四」參看、抄者不明。

七 履 軒 樞 帚 履軒先生撰

正編二卷二冊、續編二卷二冊、季編二卷一冊、共五冊（抄本）

八 樞 帚 繼 編 同

一冊（抄本）

第十七號遺書目「二二三」參看、其の内容同じ、鈔者は明かでない、後者は前者の續編と同じものであるが、誤字が多い。

九 履 軒 幽 人 文 稿 漫 錄 履軒先生撰

抄本二卷一冊

前記の樞帚季編を寫して、抄者が斯く名づけたものであるが、樞帚に收めてないものも十三

篇ある、何人の寫したものか明かでないが、柴升及び猪飼敬所の批評が處々入つて居る。

卷 永 日 堂 辨 論 履軒先生撰

前項の「履軒幽人漫錄」と内容を同じくするが、只六篇少ない、書名は鈔者の名づくる所で、何人か未だ詳かでない。

卷 履軒 古 風 履軒先生撰

第十七號遺書目「二二六」參看。

卷 履軒先生和文集 履軒先生撰

華胥國歌合（第十七號遺書目「二四〇」參看）昔の旅（同「二四九」參看）華胥驥語（同「二四二」參看）及び百首考、破腹巻記を收む。

卷 百 首 賛 履軒先生撰

鉛印本一冊

是の書は明治二十五年中井木菟庵呂先生の印行に係る活字本である、其の手稿本は早く散佚したものらしい、奥書に懷德堂門人清水中洲（仙臺藩士、名は原、字は士進、別に含章齋と號す）の識語があるが、それによると關白鷹司政道公が是の書を見たいといふので、其の臣革島兵庫をして之を懷德堂に借らしめたが、已に是の時手稿本は失はれて居た、因て中洲は履軒門人竹島立雪（簣山）が謄寫した所のものを藏して居たので、之を借覽に供したと其の由を記してある、即ち此の鉛印本は之を底本としたものである。

卷

四

茅議

履軒先生撰

抄本一冊

是の書は定家卿の百人一首を解釋したもので、賀茂真淵の説に據らぬ所から、獨特の自説を發したもので、卷首に自序及び百首考あり、以下一首々々精細なる解を施してある、何年に著はしたものか年月明かでない、尙ほには卷尾に中井木菟麻呂先生の懷德堂水哉館遺編目録が附載されて居る、参考となるべき資料である。

舊懷德堂門人小西某の寫したもので、左記四茅議の外に濱の屋、貢獻、公領、柔遠の四篇を附してあるが何れも經世の文である、而して恤刑茅議は遺書中に其の手稿本（第十七號目錄「二四三」參看）があるが、他は存しないものである、恤刑茅議は徳川時代の刑法に就て論じたるもので、家康の時定めた制度を謳歌してある、均田茅議は小作人の苦を去らんが爲に均田の法を用ゆる事を論じたもの、攘斥茅議は佛法排斥論で、現在の社寺に制を設け、後來これを破却すべき事を論議したもの、浚河茅議は漢文で書かれてある、淀川の浚渫と堤防工事とを議したものである。右の外附錄の四篇、濱の屋は大阪の河岸に濱納屋を建て、人これに住む様になりたる爲火災多くなりたるを言ひ、貢獻は大小の諸侯が將軍家に飲饌の類を貢獻するの害を述べたもの、公領はこれあるが爲に風俗悪くなるを以て、諸侯の私領となるべきを論ず、柔遠は唐土と交易するに、支那よりは藥、日本よりは書籍を最善とす、黑砂糖は大害あれば、琉球より送る事を禁すること、朝鮮の聘使は對馬だけとする事などを論じたものである。

卷 述 龍 篇 履軒先生

抄本一冊

第十七號遺書目「二五五」參看。

丸 經 界 圖 履軒先生撰

抄本一冊

第十七號遺書目「二五〇」參看。

丸 選唐詩譯解 履軒先生撰

抄本一冊

第十七號遺書目「二六八」參看、但し七言絕句十四首のみで、五言の方はない、吉林見宜（齋號來蘇館）の後人が抄したものである。

一〇〇 和夏年表内外篇 履軒先生撰

抄本一冊

懷德堂遺書には有和年表内篇一冊（第十七號遺書目「八七」參看）よりないが、是は外篇があつて、東周の平王の洛邑遷都より起り、清朝康熙廿二年伐臺灣まで記されてある、抄者は明かでないが、筆蹟より見て門人早野橋隧かと思はれる。

一〇一 履軒先生書唐詩選

一帖（管入）

右は全部草書にて唐紙に唐詩選中七言絶句十八首、五言律十首が書かれて居る、落款はない、
豎一尺三寸、横八寸二分。

一〇一 履軒先生書拓本

一帖

右は履軒先生が程伊川の四箴銘、呂與叔の克己銘及び張橫渠の東西銘を行書に書いた法帖で、文化五年夏六月咬菜窓に摹刻す、剖劂氏佐藤水石、中川化章とあり、終に同年十月作る所の早野橋隧の跋が附してある。

一〇三 履軒先生著述抄本

十種

七經雕題略論語二冊 抄者不詳、第十七號遺書目「二〇四」參看。

左傳雕題略一冊 早野橋隧先生寫力、文公十八年にて終る、遺書目錄第「二〇一」參看。

孟子雕題略二冊 抄者不明、遺書目「二〇五」參看。

典謨接一冊 中井柚園先生寫力、遺書目「一九九」參看。

履軒數聞一冊、同一冊 前者は竹島簣山の抄する所、後者は抄者不明、遺書目「二五七」參看。

經界圖一冊 竹島簣山の抄する所、遺書目「二五〇」參看。

通語三冊一套、同三冊 前者は竹島簣山の抄する所、後者は頗る履軒先生の筆意に似たり、
或は早野橋隧の壯年の筆に係るか、遺書目「二二二」參看。

履軒髦言三冊 抄者不明、遺書目「二二四」參看。

履軒外集一冊 遺書目「二三七」參看、月可錄を收む。

六種微、附六仙微、古都多飛、一冊 早野橋隧先生寫力、遺書目第「二四五、二五四」參看、
以上共に有不爲齋の舊藏に係る。

一〇四 客 中 雜 草 中井蕉園先生撰

抄本一冊

蕉園先生が伊丹、池田に遊んだ時、作る所の詩六十五篇を集めたもので、後年並河寒泉先生が同先生の詩文稿を拾輯して、壇集と名づけたが、其の中に收められて居るものである。

一〇五 雕蟲篇 附、同自註 蕉園先生撰、並河寒泉先生抄

第十七號遺書目第六十九參看、もと寒泉先生の藏書で、本篇は抄者を明かにしないが、一宵十賦の前後篇を收め、自註一冊は同先生の手書で、蕉園先生の自註を寫してある。

一〇六 卮莽漫記 蕉園先生手稿 假綴一冊

書堂の舊例として、季冬二十日より孟春二十日に至るまで休業するので、其の間に作つた文稿（詩雜體十二首、賦四篇、國詩一章）を收めてある、題箋の下に「丙子之冬、丁丑之春」と記してあるが、是は誤記であらう、丙子丁丑は寶曆六年七年で、蕉園はまだ生れない。

一〇七 蕉園先生著述抄本 四種

炎窓代睡一冊 抄者未詳、咏物五十首なり、第十七號遺書目「七六」參看。

客中雜詩一冊 抄者未詳、國部の街叔順の家に遊んだ時の詩二十六首を收む、（並河寒泉先生編する所壇集にも出づ）

壇集二冊 抄者未詳、並河寒泉先生の編輯に係るものを摘錄したものである。
壇集鈔錄一冊 抄者未詳。

以上有不爲齋の舊藏に係る。

一〇八 蕉園先生拾遺錄 外篇四、附、諸修雜篇拾輯錄 寒泉先生編並書 一冊

蕉園先生の本集に洩れた詩歌雑文を集めたもの、附錄は書堂並に書堂關係の雜篇を拾輯したものであるが僅かである、是も竹山先生の拾遺錄と同じく内篇と共に尙幾冊があつたものであるが、他は散佚した、もと大和淡輪家の書庫に在つたものである。

一〇九 蕉園嵐山兩先生文

抄本一冊

中井蕉園先生作る所徐長卿傳、再答勝子善書、答尾藤學士書の三篇と、三村嵐山先生（履軒門人）作る所一宵十賦序一篇とを收む、徐文を除き他は並河寒泉先生の書である、有不爲齋の舊藏に係る。



一一〇 篓

集 中井碩果先生撰、並河寒泉先生編並書

一冊

碩果先生の各體詩集で、四十五葉あるが、卷末が少し闕けて居る、蕉園先生の集、壇集と共に寒泉先生の編輯に成る。

一一一 篓

集 碩果先生撰、寒泉先生編並書

一冊

是は各體に整理せられないので、獲るに隨ふて寫した前記の草本である。

一一二 懷德堂夜話

碩果先生述、門人野村廣善筆記

抄本二卷一冊

右は天保七年九月二十二日より同十年十月二十二日まで、碩果先生の講義終つて、色々雜談

せられたる中に、面白い有益な話があつたのを筆記したものである、半葉十行、行毎に二十三字、凡て四十七葉、因に是の書は昭和十二年「懷德」第十五號に附錄として印行した。

二三　鬪

詩

碩果先生朱評

一帖

碩果先生當時行はれた鬪詩の一である、虞美人といふ題で一先の韻を限り、竹山門の池上梅岸、中井藍江、森岡參樹等六人の詩を載せ、而して其の一首先に其の優劣を論じた碩果先生自筆の朱評が入つて居る。

○

三四　寒泉先生遺稿

並河寒泉先生撰 手稿本三冊 抄本三冊共 六冊（一帙）

寒泉先生の詩文稿本は非常に大部なものであつたが、淡輪家本が賣立てられた時ばらくになつて散佚した、手稿本三冊は其の中のものである、而して抄本三冊は並河家に保存せられて居る手稿本を借りて寫したもので、これも完本ではない、文の方は極く僅かで詩の方が多い。

二五　華翁耄筆

寒泉先生手稿

一冊

卷首に明治七年初秋（先生時に年七十九）作る所の自序に、斯の篇や辭は則ち少壯、筆は則ち老耄、こゝに命ずる所以なり、比日舊篠底を閱するに、少壯の日或は思を述べ、或は人に答ふる等、片楮寸紙草本あり、獲るに隨ひ覽るに隨ひ淨寫し以て吾が徒に貽る云々と記されて居て、種々研究資料となるべきものが登載されて居るが、殊に其の内に一部分禮記、春秋

左氏傳等經書の錯簡説が錄せられてあるのは面白い、寒泉先生には別に「錯簡錄」といふ著述があつて、書堂先儒の説を網羅したものがある由であるが、今に見當らない、是の書も淡輪家の書庫に在つたものである。

二六 半夜嘆吟 寒泉先生手稿

一冊

夜半寐めて寐ねず、乃ち詩を思ふ、履軒先生の故智を襲ふて、千字文の字を首に冠して五絶一首を賦し次に和歌一首を作る、夕又一夕、詩歌積んで共に二百首を得た、字は則ち百、以て小限とす云々と記した文久三年仲冬作る所の自序があつて、朱字で詩を寫し、黒字で和歌が寫してある。

二七 辨怪 寒泉先生手稿

一冊

當時はなほ妖怪變化を言ふものが多いので、これを排撃した書である、辨狐怪、辨談怪、辨信怪の三篇、及び破怪三篇を載せ、終に、懷德堂先儒の遺文中、辨怪に涉るもの（蘭洲先生狐妖論、竹山先生與荒木伯遷書等）を附録としてある、弘化四年丁未仲冬著はす所、每半葉二十字、行毎に九行、凡て四十葉、是の書西村碩園先生舊藏に係る。

二八 文通 寒泉先生手稿

三冊

作文通法、屬文通字、古文通評、漢文通和の四篇に分ち、假名交り文にて文章並に用字法に就て論じたものである、唯引用文中に帆足萬里著はす所の修辭通を引いて、履軒先生の著としてあるのは、寒泉先生の誤記である。

二元家世交誼集 寒泉先生編竝書

一冊

伊藤東涯先生が、寒泉の祖先誠所、天民、機息兄弟に贈つた文又は詩を其の集中から拾集したものである、文三篇、詩二十九篇。

二〇 家祖先哲拾遺錄 内篇 寒泉先生編述

一冊

並河誠所、同天民、同說齋、同任齋、同亘川の遺文を拾輯したもので、これに寒泉先生が處々説明を加へてある、並河家の事蹟を調べるには何れも貴重な資料である、是の書も淡輪家にあつたもので、前年賣却された際散亂した爲に一冊よりない。

二一 慰友錄 寒泉先生手稿

假綴一冊

此の冊を編した意は、冒頭の「竹馬班如胡越天、交情僅有雁書傳、自今双筆染斯冊、欲擬連牀談笑筵、鳳來拜請和」とあるによつて解る、安政五年七八月頃の虎列拉病流行の慘及び當時途上聞く所の談を漢文にて六條記したもので、其の年九月二十一日の筆に係る、而して之を友人の江戸に在る原某に送り、其の人の筆に成る答書（漢文）八條が附されて居る、短篇ではあるが、中に面白き資料が多い、此の虎疫に儒者奥野小山や篠崎訥堂が斃れた事の見えて居るのは其の一つである。

二二 寒濤廬定規條目 寒泉先生撰

一綴

明治二年懷德堂退轉後、寒泉先生は同四年櫻宮に寒濤廬塾を開き、子弟を教授された、是は其の時の定書であるが、やはり懷德堂の規定を繼承したもので、全文十六條より成る。

三三寮中日課 寒泉先生手稿

一枚

寮内に掲げられた壁書である、寒泉先生が教授の時に定められた日課であらう。参考の爲左に記す。

朝 読書、質問下讀（但し翌日の分なり）、學字（冊數五冊以上）、質問（前日の下讀の處なり）、背寫（五十字以上）、背誦

午後 背誦習學（以成誦爲限）、溫故讀、背寫習學、新讀溫故、淨書（三日メ）、蒙養篇

寫字一紙

休日 新受溫讀（一枚より三枚迄五反、三枚以上一反）、讀軍談（五枚）、寫字（一枚）

午後 軍談（十枚）、寫字（二枚）

堅八寸三分、横三尺四寸、

三四 難波なかづかみ 寒泉先生手稿

假綴一冊

文久二年正月難波の南に子飼の豹ナガツカミが見世物に出たといふ由來に就て、横濱の遊女が義烈を歌ふた戯作ものである、凡て四葉。

三五 歎願口上覺草稿 寒泉先生手稿

假綴一冊

某太守に三十年來講席に出で、年々目錄を戴けるが、最早老齢なる故之を辭する旨を記せる
明治二年四月某侯用人野波八藏宛の歎願書草稿である、紙數凡て四葉。

三、升堂記聞

並河天民先生講義、並河機
息先生記聞、寒泉先生題箋

二冊

右は寒泉先生の藏書である、天民先生は書堂と直接の關係はないが、其の兄は誠所先生で、書堂の助教だつた事もある、學問は天民の影響を受けられたやうであるから、此處に收める事にした、中庸と書經との講義筆記で、機息は天民の弟である、是の書も淡輪家から出たもので、此の他に尙幾冊があるやうに思はれるが、惜しいかな散佚した。



三七 蟹街先生詩稿

草本 並河蟹街先生手稿

零本假綴一冊

蟹街は寒泉先生の子で、名は尙一、字は有勳、書堂の助教だつたが、明治元年僅に二十にして歿した、天才的な人であつた、是の書は故紙を用ひて記された詩の草稿である、別に復文を課せられた時の草稿一冊がある。

三八 蟹街先生殘稿

手稿本

假綴四冊

父寒泉先生より課せられた記事記文の殘稿で、寒泉先生の朱批が入つて居る。

三九 聞斯錄

蟹街先生錄

假綴一十三冊

右は蟹街先生が十六七歳の頃、父寒泉先生より四書五經、小學、蒙求等の講義を聞き、字句の解釋を筆記したものである。

一三〇 中村良齋先生行狀

富永芳春先生撰

抄本一冊

良齋は通稱三星屋武右衛門と稱し、懷德堂創立の際の五同志の一人である、其の人の行狀を同じ五同志の一人たる芳春先生が假名文にて記したもの、碩園先生の小天地閣叢書中「懷德堂記錄」内に收めてある。

一三一 山家集帖

芳春先生書

假綴一帖

有不爲齋舊藏に係る、山家集中の歌三十餘首を薄葉に書いたもので、奥に加藤竹里の左の識語がある。

山家集中數十首、富永芳春翁所書也、翁之國字、階梯於荒木氏、更出新意、風流閑雅、自成一家、竟造於古人之域、實藍出哉、今觀此帖、翁之氣韻、藹然可掬矣、古人云、書似其爲人、於翁乎有焉、明和戊子（五年）春日、加藤景範識、

一三二 翁之文

富永仲基先生撰

影印一冊一帙

是の書は神儒佛三教の外に別に誠の道ある事を假名文で論じた同先生特識の文字である、元文三年十一月成つたもので、本文及び序文を併せ三十七葉、是の書もと學者間に散亡したかの疑を懷かしめたが、大正甲子京都の龜田吟風學士が其の原本を獲られた、それを内藤湖南

博士が請ふて自ら玻璃板に印せられ、世に嘉惠せられたもので、其の由は博士の跋文に詳記せられて居る。

一三 出 定 後 語 仲基先生撰

二册

佛典研究の方法を論じた有名な書で、是の書板本に原刊本と補刻本とがある、是は後者で自序の文が草書になつて居る。

一四 論 語 徵 駁

井狩雪溪先生撰、仲基先生補説

抄本十卷五冊

是の書は仲基先生の友井狩雪溪（名は總、字季群、大阪の人）が荻生徂徠の論語徵を辨駁したものであるが、其の内に「仲基曰」として補説を加へたもの二十二箇條あるので、同先生の著述散亡して多く見るを得ざる際、茲に掲ぐる事にした、因にこれを抄錄したものは、「懷德」第十一號に「富永仲基の論語徵駁説」として載せてある。

一五 かはしまものかたり（革島語） 加藤竹里先生撰

一冊

竹里先生は石菴及び斎菴兩先生の門人で、國學に秀でた人である、名は景範、字は子常、竹里は其の號である、是の書は山城國葛野郡川島村の孝子義兵衛の行狀を國文にて記したものである、卷首に履軒先生の序あり、終に明和八年作る所の竹山先生の跋がある、懷德堂の藏板に係る。

三実 實 践 和 歌 集

竹里先生編

五卷合本一冊

和歌の類を以て題の歌を集めたものは多いが、詞書を以て寄せ集めたものはないので、代々の集の詞書を集め類を分ち、實踐集と名づけたと自序に記してある、寛政七年七月印行されたもので、書肆に岩崎徳左衛門、加藤源藏、加藤清右衛の名が見えるのは、其の一派であらうか、板下は凡て同先生の筆に成つたものである、附録として「初學に示す詞書の心得」一篇を附す。

三七十題百首 竹里先生撰

天象、地儀、居處、鳥、獸、蟲、草、木、人事、神祇の十題を設け、和歌各十首づゝ詠じたもので、安永九年初冬に成る。

三八 加藤竹里書簡集

抄本假綴一冊

自筆本二帖

大阪の國學者有賀長收（長伯の孫、文政十五年五月七日歿、年六十三）の家にあつたもので、是は長收の間に對し竹里の答へた書簡を帖に貼つたものであるが、長收の歌に批正を加へたものもあれば、竹里の歌を書いたものもあつて、此の内から竹里の歌を拾輯して歌集を編む事が出来る貴重な資料である。

三九 國 儒 雜 著 竹里先生手抄

假綴三冊

五井蘭洲、中井竹山、履軒、物徂徠、室鳩巢、林羅山、藪慎菴、那波魯堂、賴春水、田中仲暢、三宅春樓等の先賢作る所の詩文を收めてあるが、其の中に竹里自ら作る所の詩稿五十二

一四〇 竹里先生手抄本

(假綴)十六種

尙書管見一冊 竹山先生撰、第十七號遺書目三二一參看。

西岡集一冊 竹山先生撰、同遺書目四七參看。

詩律兆一冊 竹山先生撰、與書に「寶曆己卯初冬景範」とあり、別項第四四參看。
經說一冊 竹山先生撰、河圖洛書辨、擬與朝鮮南學士書(寶曆丁四年作)二篇を收む、是は
「寔陰集」に洩れて居るやうである。

災後義言 竹山先生撰、第十七號遺書目五六參看。

三貨圖彙序(二葉) 竹山先生撰、寔陰集に出づ。

綠毛龜圖題言(二葉) 竹山先生撰、寔陰集に出づ。

周易雕題附卷一冊 中井履軒先生撰、第十七號遺書目「一九五」參看。

諧韻瑚璉一冊 履軒先生撰、第十七號遺書目二二九參看。

深衣圖解一冊 履軒先生撰、第十七號遺書目一三一參看。

原祭禘祫辨二篇一冊 履軒先生撰、原祭は前記「續樊希」に出づ、禘祫辨は前記「履軒幽人漫錄」に出づ。

其の他鈔出したものに、連化一冊(妙法蓮華經卷中に就て一部分を鈔出し、また字句を摘解したるもの)史記四葉、(是も伯夷、管晏、老子外十餘傳中の一部を鈔出し、處々句解を施したもの)唐詩注解一冊(柳子厚、劉禹錫等の七律のみを鈔出したるもの、紙數十九葉)護法資治論一冊(森尙謙不染撰)花月吟連珠體十首(二葉、葛子琴撰)の五種がある。

以上共に十六種、伊藤有不爲齋の舊藏に係る。



一四一 草稿抄 山片蟠桃先生撰

抄本六卷三册

是の書は山片蟠桃先生の集で、詩四卷文二卷になつて居る、卷首に山片昭山仙史明治六年作る所の序あり、撰者氏名は長谷川有躬改山片芳秀と署してある、尙卷端に故内藤湖南博士が是の書を獲た由を記した識語がある。同博士藏本を借り、本堂聽講生酒井全君これを抄寫す。



一四二 三體詩雕題 早野橋隧先生撰

抄本一册

橋隧先生名は正己、字は子發、橋隧又は反求、反堂、流水とも號した、仰齋の子で履軒先生の高弟である、此の書は斐季昌の増註本に據りて、誤字を訂し、また本文並に註解に對して批正したものであるが、是の書原本は恐らく別冊でなく、書籍の欄外に首書されたものを、何人か之を寫して、履軒先生の雕題本に倣ひ、斯く名づけたものであらう、有不爲齋舊藏。

一四三 橋隧骨董 橋隧先生撰

抄本二册

右は有不爲齋の舊藏に係る、橋隧先生の詩集で、第一冊五言律、百二十四篇、第二冊は七言律百十四篇を收めてある、是の書原来三冊本で、尙五七言絶を收めたもの一冊ある筈であるが、闕けて居る、大阪蒲田利郎氏が其の手稿本を所藏の由であるが、まだ覽るを得ない。

一四七 離鬪詩 橋隧先生評、並河寒泉先生抄

一冊

竹山先生歿後は、橋隧先生が詩社を設けて同志を導いたらしい、時々題を課して二人を組合せ詩を鬪はした、是は其の一片である、螢離艸とか鶴離洲とか云ふ題を七つ出して、之に對して、同人の岡寅齋、藤田如水等十人が作つたものに各批評を加へたもので、何れも七言絶句である、

一五 履軒先生行狀

早野小石先生撰

一冊

右は碩園先生の小天地閣叢書乾集中、「懷德堂記錄」冊内に收めてある、是の篇撰人名氏を著はされないが、原本の筆迹を按するに早野小石先生に似て居るとの事である、小石は橋隧の子で、名は良輔、字は士序、小石又は思齋と號した、詩を善くした人で、詩稿がある筈であるが、散亡して傳はらない。

一六 花間笑語 三村嵐山先生撰

抄本一冊

嵐山先生は橋隧と同じく履軒先生の高弟で、名は原、字は子逢、嵐山と號した、是の書は戯謔に涉る笑話一百數十條を漢文にて記したもので、同先生の識語によると、余成童文辭を學んだが、尤も記事の難きに苦んだ、因て耳目の接する所隨ふて之を筆したもの今に於て二十

年、偶籠を探りて事戲謔に涉るものを整頓次第して、以て幼學筆を弄するものに示す云々と記してある、文化五年仲秋の編著に成る、毎半葉九行、行毎に十八字、凡て四十八葉。

一四七 簣山文稿

竹島簣山先生手稿

一册

簣山先生は履軒門の竹島蕉齋の子で、名は衡、字は倚先、立雪と稱した、同じく履軒先生の門人である、是の書は其の文稿で、小筈祕方錄序、釣遊記等十三篇と、小史篇と題し、常山紀談などを漢譯したもの五十餘篇を載す、伊藤有不爲齋舊藏に係る。

一四八 耳聞手記

抄者未詳

假綴一册

書堂先賢の詩を寫した小冊子であるが、抄者は明かでない、碩果先生當時の人らしい。

一四九 大日本史目錄

抄者未詳

二册

安永元年二月竹山先生が大日本史を謄寫せしめて校讐亦隨ふて畢り、これを書堂に備へたが、(第十七號遺書目一〇五參看)是は淡輪家に於て、書堂本を借りて寫したものである。

一五〇 雜記

抄者未詳

一册

履軒先生の筆意あれば或は其の門人か、草稿用に用ひた雜記帖である、有不爲齋舊藏。

一五 懷德堂先賢墨迹

内藤湖南、西村碩園兩先生共編

一帖一帙

右は大正元年八月東京隆文館の發行に係る、懷德堂の先賢及び懷德堂關係諸儒の墨迹八十餘點並に印影を影印に附し、終にそれべの小傳が載せてある、尙卷末に中井黃裳先生の跋があつて、是の書編纂の由來が記されて居る、堅一尺二寸七分、横九寸。

一三 懷德堂遺書

十六冊

右は明治四十四年十月懷德堂記念會に於て發行したもので、懷德堂五種一冊（別項第一、三一、三二、五六、六一參看）、蘭洲茗話二冊、（別項一六參看）、勢語通二冊、（別項一五參看）、寔陰集五冊（別項四五參看）、竹山國字牘二冊（別項五二參看）、論語逢原四冊（別項七三參看）、以上六種十六冊を收めてある。

一四 懷德堂遺書紙型

一二函

前項遺書の紙型で、寔陰集十包一函、懷德堂五種一包、蘭洲茗話二包、勢語通四包、竹山國字牘二包、論語逢原三包以上一函に收む。

一五 懷德堂印存

懷德堂記念會編

二册一帙

是は明治四十四年懷德堂先哲祭の際、有志相謀りて、中井黃裳先生保存に係る竹山、履軒、

蕉園、碩果、柚園、桐園六先生の印章を借り、百部を限りて其の印譜を製したものである、
帙内に黄裳先生が附言と題して、先賢中三宅萬年先生は終世印章を用ひず、鼈菴、蘭洲、春
樓蓋し各々數顆あらんも、散亡して傳はらず、故に懷德堂の遺印は竹山を以て首とする、而
して今存するものは、竹山の印章八十四顆、履軒五十四顆、蕉園十六顆、碩果四顆、柚園十
七顆、桐園三十顆であると記されて居る、巻末に西村碩園先生、及び黄裳先生の跋文が附し
てある。

一五 懷德堂印存 野内丘外君編

三冊一帙

右は昭和十四年三月住友の野内丘外君が中井家より遺印を借り、五十部を限り追押されたものである、同君は同風印社の同人で篆刻に巧みなるより、題箋屏等の文字、及び黒印等自ら刀を執り、また前記印存の足らざるを補ひ、完備したる印譜としたもので、裝釘は七冊本と三冊本との二種ある、巻首に押せる「懷德堂」三字印は、散佚して中井家に傳はらないものであるが、同君は書物に押捺せる印影より新に模刻された、而して是の書作製と共に他の自刻のものを併せ悉く本堂に寄贈された、茲に其の勞苦と厚意とに對し、感謝する次第である。

○附、幅額屏風器物類

一五六 竹山先生畫像 中井藍江筆、竹山先生自贊

一幅

是は寛陰集に「題予寫照」と題して、其の序に「(寛政十年) 戊午正月既望初講日。宴酣。書
畫競作。溢井子要揖畫人藍江寫予講坐像。席賓迫予銘之。不得辭免。醉中援毫卽書」とある

のが即ちこれで、先生六十九歳の時である、側面圖の上に舉比坐斷、四十四年云々八句の自贊が手書せられて居る、堅四尺三寸、横一尺八寸五分、而して此の講座像はもと並河寒泉先生の許に在つたものであるが、何時の頃か京都の富岡鐵齋翁の手に歸したのを、大正十三年同翁から本堂に寄贈されたものである。

一五七 竹山先生畫像

是は前記原書の畫像を影印に附したもので、明治四十四年十月五日懷德堂先賢記念祭の際に、中井黃裳先生が當時並河家に在つた同畫像を百部影寫して同會に寄贈された、それを表裝したものである。

一五六 履軒先生畫像

是は前號遺物目中「三一〇」に載する所の文清先生遺像と題するものゝ寫しで、先年必要ありて池田の畫工山田某に模寫せしめたものである。

一五九 鷹子扇面一幅 中井履軒先生書

一幅

扇面に「たかのこは、まろにたうばらん手にすゑて、あはづの原の、くるすのわたりの、うづらとらせんや、さきんだぢや」の催馬樂一首が認められてある、懷德堂講師故稻東猛君の寄贈に係る。

一六〇 石菴先生書扇面額

一面

草書にて扇面に「江左風流」の四字を記す、右端下に「萬年書」とあり。

二六 竹山先生賦鶯籠詩額

一面

應菅公命、賦鶯籠の題にて五言排律一首を書す、庚寅（明和七年）春の筆に係る。豎九寸五分、横一尺六寸四分。

二七 竹山先生書刻額

一面

行書にて「青出于藍而青于藍、七十四翁竹山居士書」と書す、豎一尺一寸三分、横三尺四寸三分、右は大正五年五月舊懷德堂贊友會員木積一路、大町安敬外十名の寄附に係る。

二八 履軒先生書白鹿洞掲示刻額

一面

右は天明二年先生五十一歳の時書かれたもので、一寸八分角大の端嚴な楷書である、原書はないが、それを竹山門の前川虛舟が檼材に刻したもので、裏に「天明二年壬寅仲冬積徳書、虛舟刻」と刻してある、豎一尺三寸九分、横六尺二寸、新懷德堂重建の際、愛日小學校の寄贈に係る。

二九 履軒先生書白鹿洞掲示刻拓本額

一面

謹嚴な楷書にて白鹿洞掲示が書いてある、署名はないが、左端に蕉園先生の筆で、「右幽人翁之書、蕉園鑒」と記されて居る、後年板木に上したものであらう、前川虛舟の刻に係る。豎一尺一分、横二尺五寸五分。

一五 懷德堂記刻額 竹山先生書

一面

右は大正五年懷德堂重建の際、講堂に掲ぐべく門標と共に京都の山本竟山翁に嘱して、其の門人某が前號遺書目第一五五の懷德堂記を雙鉤に取り、樟板に刻したもので、故あつて掲げて居らぬが、實に立派なものである、堅二尺四寸、横八尺。

一六 懷德堂門標 石菴先生書

一面

前項「懷德堂記」刻額と同時に、山本竟山翁に嘱して、記帖に掲ぐる題字三字を取り、樟板に刻して貰つた、所が是は惜しいかな大正八年頃盜難に罹つた、爲に其の後西野田職工學校に委嘱して刻して貰つた、現在のもの即ち是れである、堅四尺六寸、幅一尺二分。

一七 石菴蘭洲二先生張交屏風

四曲半雙

此の屏風には石菴蘭洲兩先生の遺墨を集めたもので、これによつて兩先生の遺文を拾輯する事が出来る貴重な資料である、石菴先生の書は別項所載「紫煙帖」（唐詩絶句十九首）の原書六枚が入つて居る外、南洲逢騷客七絶、客中上已看桃花店七絶一、天下名山云々の文一、「冽菴」「碧菴」「既翁」と大書せる扇面三紙、唐詩を細書せる扇面一、草書にて詩句を書せるもの五、行書のもの五、楷書のもの一、中井碧菴、同常菴宛の書柬（堅五寸二分、横二尺三分）中井玄端宛の書柬（堅九寸三分、横一尺四寸四分）各一通、共に計二十六紙を收む。次に蘭洲先生のものは寛延二年作る所の題跋一、（堅九寸、横一尺一寸五分）奉呈節齋橋書一（堅八寸三分、横二尺九寸八分）畏説一（堅六寸八分、横六寸五分）和歌二紙、墨竹圖（竹山識語）扇面一、唐詩を書せるもの（何れも二寸角大の行書）十二紙、以上十八紙を貼してある。

二六 竹山履軒諸先生張交屏風

二曲半雙

右の一曲は、竹山先生の書「文章道之羽翼」（堅三尺五寸五分、横六寸）扇面に記せる「雨中漁父圖」と題する七絶、己酉春拜謁大執政源公席上作七絶（堅六寸、横四寸）及び斉菴先生の書「樂山」（堅六寸八分、横一尺六寸八分）蕉園先生の弟碩果に與ふる書牘（堅四寸八分、横一尺六寸八分）無攸畏云々の五絶（堅六寸、横四寸）及び舟行雜詠と題する五絶十三首（堅九寸六分、横一尺二寸一分、畫工竹堂（名は紀寧、氏未詳）の筆に係る蕉梢落月の圖（堅二尺八寸、横九寸二分）の八枚を貼してある、左の一曲は履軒先生の墨竹の圖並に贊（堅四寸二寸五分、横四寸九分）及び日々江上磯云々の五絶二首（堅一尺四寸七分、横五寸三分）及び行惡之人如磨刀之石云々の書（堅九寸一分、横一尺一寸三分）催馬樂一章を記せる扇面の書、竹山先生の君恩已盡欲何歸云々の七絶（堅一尺一寸四分、横一尺六寸七分）及び安達明府に與ふる書柬一通（堅五寸、横二尺三寸五分）斉菴先生の酒井貞藏に與ふる書柬一通（堅五寸二分、横一尺五寸八分）蕉園先生の養病于常安舍、簡壽王平君と題する七絶一首（堅五寸六分、横九寸一分）以上八枚が貼られて居る。

二七 懷德堂鏤板方鑑

一個

右は懷德堂考定中庸（遺書目錄第一九、第二一參看）及び懷德堂記（同第一五五、第一五六參看）の板木四枚を四方に用ひて造つた方一尺三寸六分、高さ九寸七分の火爐で、もと大阪花屋旅館に在つたが、花屋産を失して昭和十年日本生命保険會社の手に歸した、それを先年其の會社より本堂に寄贈されたものである、中井黃裳先生は之を納めた箱の蓋上に識語を書

かれて、何物の俗漢か聖賢の語を毀ち、猥に家具となすと慨かれて居る、尙定本の板木は履軒先生の書で二十一刻あつたものであるが、今は一は表裏に中庸定本の四字を大書したものの、一は第十五章と第十七章とを書いたものとの二枚のみ、他の二枚は享和元年秋竹山先生の書を表裏に刻した懷德堂記である。

以上共計一百六十九點

所懷
德堂
懷德堂先賢著述書目 終